

DOC

UME

NT

302

アートプロジェクトの  
担い手たちのラボ  
ROOM302  
の記録

2009——2022

## DOCUMENT302

### アートプロジェクトの担い手たちのラボ ROOM302の記録 2009-2022

2010年、東京都千代田区のアートセンター「アーツ千代田3331」の302号室に「ROOM302」の前身となる「TOKYO ARTPOINT PROJECT ROOM302」が誕生しました。広さは約90平方メートル。現在の公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が運営を担います。元中学校の音楽室を改装し、イベントやレクチャー、アーカイブ、打ち合わせ、あるいはさまざまな実験的な活動の舞台となってきました。2020年には、ROOM302の一角に配信・収録スタジオ「STUDIO302」をオープンするなど、時代に応じて幾度も変化を続けています。そして2023年3月、アーツ千代田3331との契約終了に伴い、惜しまれながらもROOM302の運用に終止符を打つこととなりました。

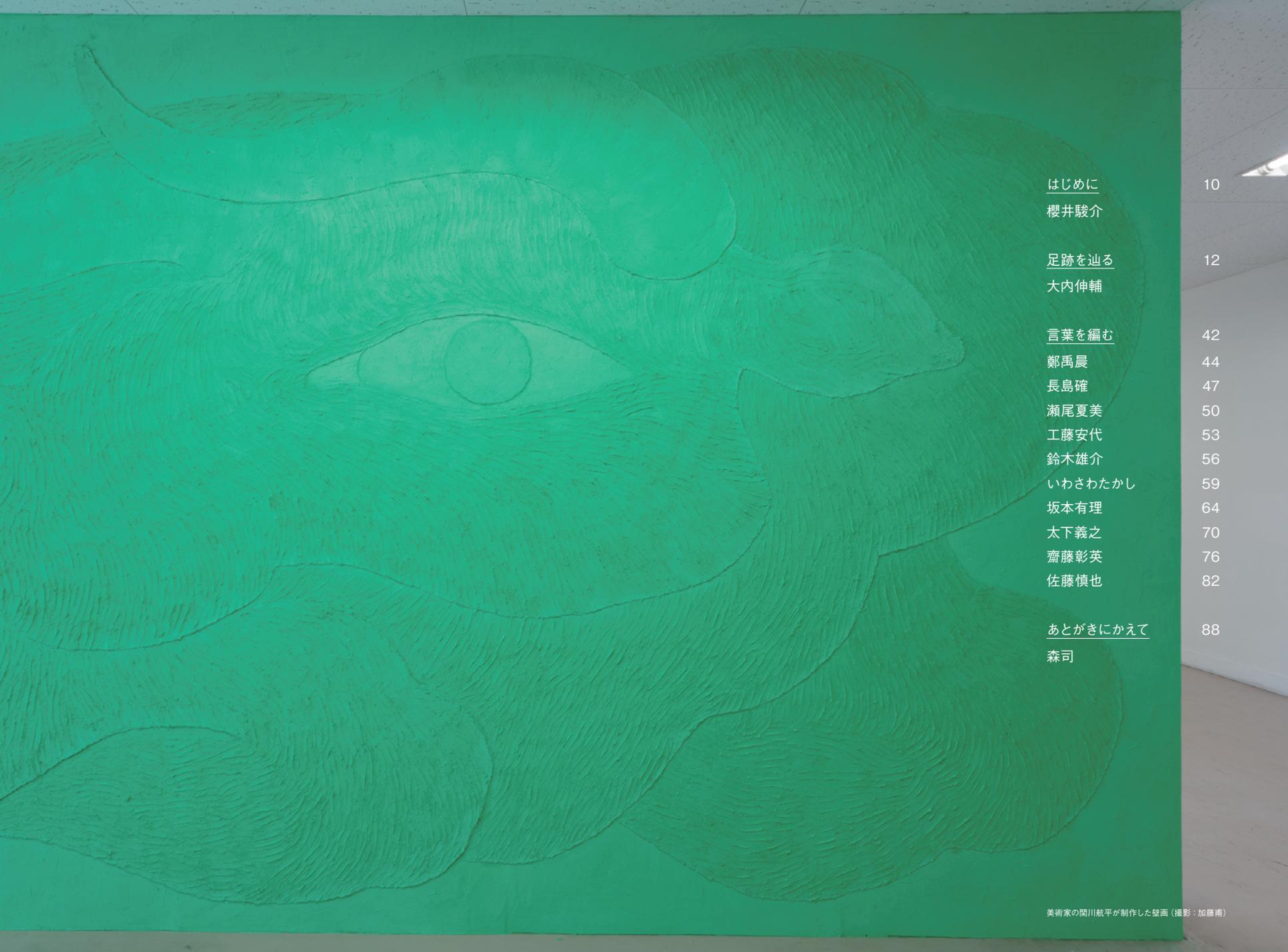


TOKY  
ROO





撮影：川瀬一絵



はじめに  
櫻井駿介

10

足跡を辿る  
大内伸輔

12

言葉を編む  
鄭禹晨  
長島確  
瀬尾夏美  
工藤安代  
鈴木雄介

42

44

47

50

53

56

いわさわたかし

59

坂本有理

64

太下義之

70

齋藤彰英

76

佐藤慎也

82

あとがきにかえて

88

森司

## はじめに

本書では、10年以上にわたってさまざまな活動の場となったROOM302のありようを、数々の写真と、各年度の出来事をまとめたテキスト、この場所にゆかりのある人々からの寄稿によって辿りました。

記録写真を並べると、この部屋に流れてきた風景の一端を見ることができます。机や椅子のレイアウト、壁の色、本棚、配信スタジオといった佇まいの変化はもちろんですが、壇上のゲストの話に耳を傾ける受講生、仮設スクリーンに映されたプレゼンテーション、机や壁一面に残る色鮮やかな筆跡、本と言葉に囲まれた展覧会、輪になって議論を交わす人々、床の上に転がったスイカ、モニター越しにつながるスタジオと参加者の部屋など、それぞれの時代の手つきや、部屋に立ち込めた空気が伝わってきます。

こうした活動の広がりや、単に設備の自由度や、スタッフの手間暇によることだけではないようです。ここでならば、ふと浮かんだアイデアを試したり、次のステップを踏む前にじっくり悩んだり、すこし道をそれて話を膨らませてもいい。小さなきっかけから、えいやという勢いまで、この部屋を訪れるアートプロジェクトの担い手たちの主体的な姿を大切に、ともにこの場所から課題に向き合っていく。何よりも実際に「場所」がある意味は大きく、多くの試行錯誤を受け止めながら、知見を積み重ねて、この場所を起点に各地へ関わりしろが育まれることになります。

本書の前半では、そうした場の変化に伴走しながら生態系を支えてきたスタッフが、ROOM302の設立から解体までの14年を振り返ります。後半は、この部屋での月日をそれぞれの関わり方で過ごしたアートプロジェクトの担い手たちが、その眼差しを記しました。

それぞれの語りが、この場所を何と呼ぶのか、この場所から何を見ようとしていたのか。数々の視点や言葉を集めた本書を通じて、文化事業としての拠点形成を考える「思考の種」を読者のみなさまに手渡します。

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー  
櫻井駿介



## 東京の未来を語るトークから、302がスタート

アートプロジェクトの実施を通じて東京の文化の担い手を育てることを目指す事業「東京アートポイント計画」がスタート。実践の場と両輪となる、誰もが参加できる人材育成事業も立ち上げた。事業の会場となる施設の空きスペースを常に探し続ける必要がある、参加者たちが1回きりの関わりとなってしまいう、など常設の教室の必要性が顕著になった。ちょうどそのころ、中学校の廃校利用として「ちよだアートスクエア(仮称)」ができるとのニュースがリリースされる。のちの「アーツ千代田3331」である。

翌年度の人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」の本格始動や、東京アートポイント計画の各プロジェクトでの打ち合わせ場所、イベントスペースとしての活用を目指して、入居の調整に入ることになった。アーツ千代田3331のプレオープンが2010年3月14日。東京アートポイント計画としての最初のプログラムは、オープン前の3月2日より「川俣正 トークシリーズ 東京を考える、語る」からスタート。アートセンターになる直前の準備中、工事中のフロアを抜けて、3階の一番奥の部屋「TOKYO ARTPOINT PROJECT ROOM 302」で東京の未来を考えた。

—  
アーツ千代田3331開館前の4日間で6つのトークプログラムを実施。約160人の参加者が302を訪れた。



# 2009

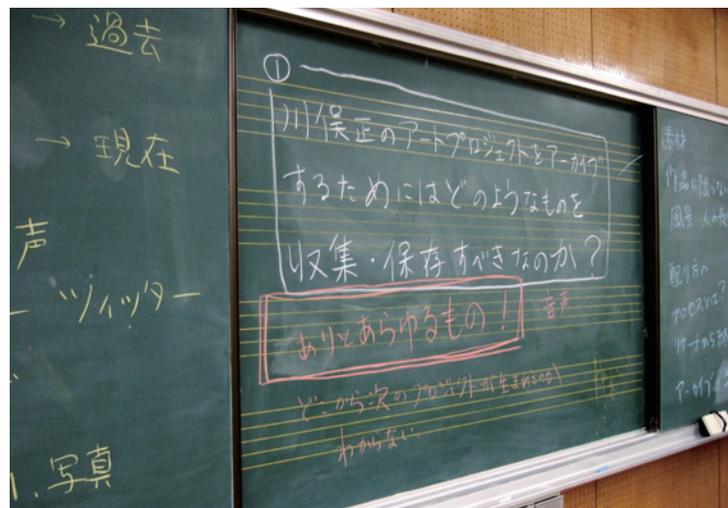
設立当初のROOM302の外装  
「川俣正 東京トークシリーズ 東京を考える、語る」建築家である隈研吾との対談

## アートプロジェクトの担い手のための教室へ

元中学校の教室だった302は、学び舎としての機能と姿を取り戻すことになる。6月、リサーチ型の人材育成事業としてTokyo Art Research Labが始動。「プロジェクト運営」「アーカイブ」「お金と法律」「歴史と現在」「評価」などを学ぶことができる10講座が開講された。受講者の学びはもとより、講座自体を講師陣と共同開発することで、まだまだ未成熟な「アートプロジェクト」という活動そのものを鍛え、育むという方針が立てられた。集中講座、公開講座、通年のゼミなど、2010年の終わりには多くの講師や受講生が行き交う場所となった。また、講座で収集した国内外のアートプロジェクト関連資料を配架し、閲覧できるアーカイブセンターを目指して「P+ARCHIVE」プロジェクトがスタートした。

防災をテーマにしたアートプロジェクト「イザ!カエルキャラバン in 東京」が防災実践者とともにシンポジウムを行っていた2011年3月11日、東日本大震災が発災。全員で3331隣接の公園へと避難する。プログラムを中止したのち、302は被災状況を伝えるニュースをスクリーンに映すメディアセンターとなり、その後の数日間は避難所へと姿を変えた。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャー、研究会などを約120回実施、約580人の参加者が302を訪れた。そのほか、まちなかに拠点を持たない東京アートポイント計画（「川俣正・東京インプログレスー隅田川からの眺め」や「岸井大輔プロジェクト 東京の条件」など）の打ち合わせやイベント会場として通年で活用した。



## アートプロジェクトに特化した アーカイブセンターを開設

教室として回りはじめた302。2010年から継続する講座に加え、「クリエイターのための確定申告相談会」を開催。ニーズに合わせた講座や環境整備によって、アートプロジェクトを担う人々のための「使えるラボ」を体現していく。国内外のアートプロジェクトの資料収集に合わせて、保管のための本棚を設置。教室全体も白を基調とした内装、外装へと全面的にリニューアルした。デザインは青木淳建築計画事務所が担当。さらに「東京文化発信プロジェクト」のインフォメーションスペースとしての機能も加わることとなったため、名称を「東京文化発信プロジェクトROOM302」へと改称した。

隅田川沿いでは「川俣正・東京インプログレス」が2つ目の物見台の設置に向けて佳境を迎えていた。何度も修正を加え、作り直した作品の模型を囲み、議論を重ねたプロジェクトルームとしての機能も302の重要な役割のひとつだった。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャー、研究会や相談会などを約80回実施、約2,000人の参加者が302を訪れた。また、7月よりアーカイブルームをオープンし、毎週水・木曜日に一般公開した。東京アートポイント計画（「川俣正・東京インプログレス」や「イザ!カエルキャラバン in 東京」など）の打ち合わせやイベント会場として通年で活用した。



全面リニューアルしたROOM302の外装  
白を基調にした内装

## アートプロジェクトの定義化を試みる

2010年より東京藝術大学の熊倉純子教授を中心としたアートプロジェクト研究会と取り組んできた「日本型アートプロジェクトの歴史と現在」が3年目を迎え、2年間の基礎的な研究と議論をもとに「アートプロジェクト」の定義化を試みる。また、大きなインパクトを受けた2011年の東日本大震災以降の動きを捉える活動にも着手する。これらの成果をもとに『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』（2014）が出版され、これまでなかったアートプロジェクトそのものに関する言説のひとつの基幹となった。

各講座の進捗情報や東京アートポイント計画のプログラムを共有する「ネットワーキング・ラボ」を月1回開催。各現場からディレクターやアーティスト、事務局長などの担い手をゲストに招き、講座と現場をつなぐ場となった。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャー、ゼミなどを約100回実施、約1,400人の参加者が302を訪れた。アーカイブルームを毎週水・木曜日に一般公開した。東京アートポイント計画（「川俣正・東京インプログレス」や「公園プロジェクト」など）の打ち合わせやイベント会場として通年で活用した。



## 新たなアートプロジェクトを生み出すための準備室

NPO法人アート&ソサイエティ研究センターとともに集めたアートプロジェクトに関する資料が2,000件を超え、本棚を拡充することに。設計、施工は「川俣正・東京インプログレス」でも作品制作を手がけた鈴木事務所が担当。3面の壁が本棚となり、一見してアーカイブセンターであることがわかる空間となる。

アーティストの宮島達男と現代の作品の保存と修復を考える「プロジェクト構想プログラム—「光の蘇生」プロジェクトを構想する」や、これからのアートプロジェクトに多角的に関わる人材を育成することを目指して、ドラマトゥルクの長島確とともに「プロジェクトのつくりかた」を開発する「長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ」を実施。次なるプロジェクトを生み出す準備室として、アーティストからの問いを起点に、ゲスト講師や受講生それぞれがディスカッションを通じて、新たな言葉を紡ぐプログラムを展開した。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャーを約70回、通年で取り組む研究・開発プログラムを6シリーズ実施したほか、公開研究会を約20回開催し、約1,200人の参加者が302を訪れた。アーカイブルームは毎週木・金曜日に一般公開。東京アートポイント計画のキックオフや活動報告のイベントを開催したほか、「長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ」の活動拠点として7月より毎月6回程度開室した。



# 2013

壁一面の本棚はROOM302のシンボルとなった（制作：鈴木事務所）  
「プロジェクト構想プログラム—「光の蘇生」プロジェクトを構想する」の様子

## プロジェクトを振り返り、価値をかたちに残す

2013年に東京アートポイント計画初の島嶼部事業であった「三宅島大学」が終了。大学の研究室や多数のアーティストが関わったプロジェクトが想定よりも早期に終わりを迎えることになったため、関係者による振り返りを行い、3年間の営みを価値化するための検証プロジェクト「三宅島大学誌」を実施。成果は同名の冊子へと編纂され、302において閲覧可能な「成果物」として残ることとなった。

Tokyo Art Research Labが新機軸、「思考と技術と対話の学校」をスタート。単発の講座の集積から、1年かけてプロジェクトの基礎を学ぶ「学校」へとシフトした。事務局を担う一般社団法人ノマドプロダクションが302に隣接する301号室に常駐し、資料のレファレンスやプロジェクトの相談、講座の成果物制作など受講生の学びをサポートした。通年でひらく学校としたことにより、受講生にとっても教室やスタッフ、同期生に愛着が生まれ、コミュニティが育まれていくこととなる。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャーを約40回、通年で取り組む研究・開発プログラムを7シリーズ実施したほか、公開の研究会を約10回開催し、約500人が302を訪れた。アーカイブルームは毎週木・金曜日に一般公開した。東京アートポイント計画「長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ」の活動拠点として毎月数回開室したほか、「Art Bridge Institute」や「東京迂回路研究」のトークプログラムを合わせて16回実施した。



「思考と技術と対話の学校」のスタートとともに、本格的に教室として活用がはじまった講座「アートプロジェクトを456(仕込む)」の様子

常に学びと情報がある場所、  
アーツカウンシル東京 ROOM302 へ

4月1日より東京文化発信プロジェクト室がアーツカウンシル東京と組織統合したことに伴い、名称を「アーツカウンシル東京 ROOM302」へ改称。アーツカウンシル東京の助成金情報の発信などがインフォメーション機能に付加される。「思考と技術と対話の学校」は2014年にスタートした「基礎プログラム 1」に加え、前年の受講者の2年目を想定した「基礎プログラム 2」を並行してスタート。受講者は倍増することとなる。

東京アートポイント計画は2014年に「リライトプロジェクト」「Art Bridge Institute」「東京スープとブランケット紀行」をはじめとする8つの新規事業を立ち上げた。それぞれのプロジェクトでインターンやプロジェクトメンバーを募りはじめた2年目、302は空き日程の調整が困難になるほど、稼働頻度が上がった。土日はTokyo Art Research Labの開講、平日昼はアーカイブセンターの開室、平日夜は東京アートポイント計画のプログラムと、開室スケジュールの基軸が整い、常に動いている状態が継続することとなる。

—  
Tokyo Art Research Labのレクチャーを約50回、通年で取り組む研究・開発プログラムを6シリーズ実施し、約180人の参加者が302を訪れた。アーカイブルームを毎週木・金曜日に一般公開した。東京アートポイント計画の「Art Bridge Institute」や「リライトプロジェクト」、「東京スープとブランケット紀行」などによってさまざまなイベントや人材育成プログラムを約30回実施した。



2015

「東京スープとブランケット紀行」トークシリーズの様子  
Tokyo Art Research Labでは、さまざまな専門家たちを招いて講座をひらいた

アートプロジェクトをともに歩む仲間がいること、  
集う場所があること

東京アートポイント計画が新規事業の公募をスタート。募集説明会では各事業の成果物や資料を配置し、プロジェクトの様子を効果的に示すことができた。302を利用して研鑽を積んだ受講生からの応募にもつながった。

11月に起きた都内のアートイベントでの事故を受けて、東京アートポイント計画とTokyo Art Research Labに関わるメンバーを緊急招集。法律や会場施工の専門家をゲストに招いて「リスクマネジメントを考える会」を行った。アートプロジェクトの現場は「まち」という公共空間であり、常にリスクや制度と隣り合わせにあることを確認し、それぞれのプロジェクトでの学びとした。アートプロジェクトを実践する上で考えるべき課題や障壁と向き合った際に、相談できる仲間がいること。そして集って語ることができる場所があること。これらが強みであることに気づきを得て、以降の拠点形成事業やネットワーク事業への力点に確信を得ることになる。

Tokyo Art Research Labのレクチャーを56回、通年で取り組む研究・開発プログラムを6シリーズ実施し、約270人の参加者が302を訪れた。アーカイブルームは毎週木・金曜日に一般公開した。東京アートポイント計画の「Art Bridge Institute」や「リライトプロジェクト」、「東京迂回路研究」などによるイベントや人材育成プログラムを25回実施したほか、「Betweens Passport Initiative」の通年の活動場所となった。



2016

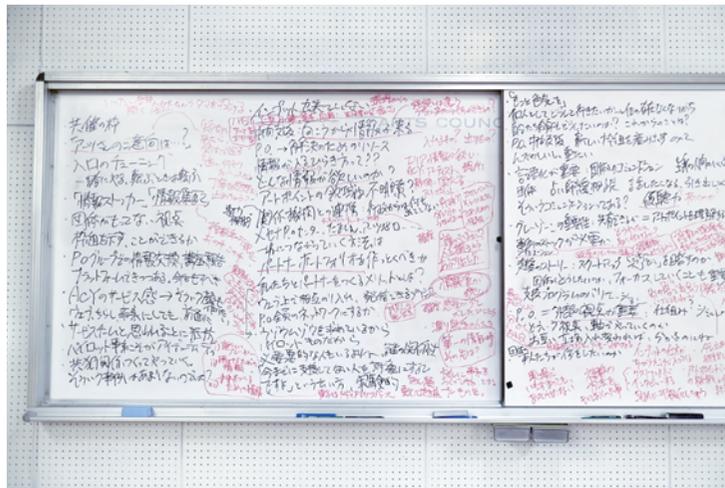
「リライトプロジェクト」では準備運動からワークショップをはじめた  
「思考と技術と対話の学校」では、アートプロジェクトについてチームに分かれて考えた

アートプロジェクトの中間支援ための場所であること

アートプロジェクトにおける中間支援のあり方を検討するため、プログラムオフィサーを中心に「地域と文化と制度の勉強会」を実施。文化事業における課題を解決につなぐために、間に立って情報集配を行う姿勢について学んだ。それらを具体化するため、「アートプロジェクト相談窓口」を実施。プロジェクトの悩み相談を受けることで、東京アートポイント計画の公募を目指す団体のニーズ調査と情報発信へつなげた。また、3331が開催するアートフェアに合わせて「OPEN ROOM」を開催。アートプロジェクトに関するトークイベントやワークショップ、アーカイブ資料の公開、公募説明会など、アートプロジェクトを知り、深めるプログラムとして好評を博した。

302がオープンして8年が経ち、什器などが経年劣化してきたため、現状に合わせて部屋のリニューアルを実施。増えていく資料をわかりやすく収納する仕組みや、バックヤードの空間を確保。直接メモやアイデアを書き込めるホワイトボードにもなるテーブルは、プロジェクトのミーティングやワークショップに活躍した。

Tokyo Art Research Labのレクチャーを33回、通年で取り組む研究・開発プログラムを5シリーズ実施。アーカイブルームは毎週木・金曜日に開室した。また、OPEN ROOMの5日間には約750人が302を訪れた。東京アートポイント計画の「TERATOTERA」や「リライトプロジェクト」などによるイベントや人材育成プログラムを約30回実施したほか、「Betweens Passport Initiative」の通年の活動場所となった。



「地域と文化と制度の勉強会」では中間支援のキーワードをひたすらに書き出した講座「体験を訪ぐ」の様子（撮影：川瀬一絵）

## 東京アートポイント計画の10年を伝える展覧会

10周年企画として302初の大規模な展覧会となる「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」を開催。これまでの活動で紡がれた「ことば」を壁面と廊下に、各プロジェクトで生まれた冊子200点を展覧会専用設計された什器とともに展示した。会期中は公募説明会や相談窓口、プロジェクトの担い手たちによるトークイベントを実施。説明会は廊下に列ができるほどの参加者数となり、例年より熱を帯びた内容となった。展覧会には全国のアートプロジェクト関係者が訪れ、知見が詰まった本を手に取り、各地の現場へと持ち帰っていく光景が繰り広げられた。

Tokyo Art Research Labでは“東京で何かを「つくる」としたら”という投げかけのもと、勉強、調査、研究、試作を重ねる「東京プロジェクトスタディ」がスタート。演劇、音楽、美術、パフォーマンス、建築などの分野で活躍するアーティストやディレクターをナビゲーターに迎え、受講生とともに5つのスタディを展開。以降4年間はスタディ、レクチャー、ディスカッションをベースに、プロジェクトを「つくる」担い手の育成拠点となった。

—  
Tokyo Art Research Labのスタディ、レクチャー、ディスカッションや説明会を約50回、通年で取り組む研究・開発プログラムを4シリーズ実施した。アーカイブルームは毎週木・金曜日に開室。「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」及びOPEN ROOMを開催した17日間には約1,700人が302を訪れた。また、東京アートポイント計画の「TERATOTERA」「Betweens Passport Initiative」などによるイベントや人材育成プログラムを約20回実施した。



## 定期的に集う学び合いの場、ジムジム会

2016年に実施した勉強会「リスクマネジメントを考える会」の手ごたえをもとに、通年で東京アートポイント計画をともに実施するNPOが学び合う場として「ジムジム会（事務局による事務局のためのジムのよう勉強会）」をスタート。年間テーマを「届け方・つなぎ方の筋トレ」と設定し、定期的に通うジムのように事務力を鍛えた。それぞれのプロジェクトで制作したチラシやドキュメントブックを持ち寄り、手に取って感触を共有する。これまで出会うことのなかったNPOのメンバーたちが交流することで、先行事例に学び、有効な技術を持ち帰り、それぞれの悩みや課題を解決する一連のフローができあがった。

翌年の準備として「手話と出会う研究会」を実施。身体を使ったワークショップなど、アートプロジェクトの現場のアクセシビリティ向上のための講座開発を行った。302でのアートプロジェクトの担い手のための手話講座は、オンライン展開をはじめ2020年以降の主力プログラムへと成長する。

—  
Tokyo Art Research Labのスタディ、レクチャー、ディスカッションや説明会を約40回、通年で取り組む研究・開発プログラムを5シリーズ実施し、約550人の参加者が302を訪れた。アーカイブルームは毎週木・金曜日に一般公開した。また、東京アートポイント計画の「TERATOTERA」「ジムジム会」などの勉強会や人材育成プログラムを約20回実施した。



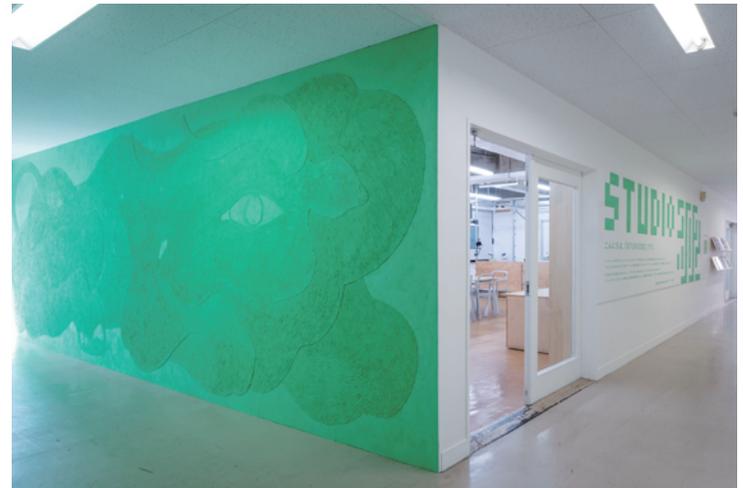
「ジムジム会」では、それぞれのプロジェクトの広報物を持ち寄り共有した「ディスカッション」の様子（撮影：齋藤彰英）

## 「集うこと」を止めないための STUDIO302

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、人と人が集うことが困難な状況となった。それでも集うこと、学ぶことを可能にするため、302の一角に映像の収録と配信を可能にする新たな拠点「STUDIO302」を7月に開設した。空間設計、施工は岩沢兄弟が担当。302でのこれからのニーズを汲み取り、誰もが簡単に扱える必要な機能に絞ってつくられた。アーツカウンシル東京のさまざまなプログラムがオンライン化を図るなか、いち早く立ち上がったスタジオはオリンピック・パラリンピックに向けて文化事業を止めずに続けるための生命線となった。

オンラインプログラムへのシフトや実験を後押しする場となったことで、多くのプログラムが302で開催された。東京アートポイント計画の「TERATOTERA」が実施した「TERATOTERA祭り」のライブ企画や、「Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）」の一環として福島とつないで演奏を届ける「オンライン報奏会」など、元音楽室であった302で再び音楽が奏でられる機会ともなった。

スタジオを活用し、Tokyo Art Research Labのスタディ、レクチャー、ディスカッションを約50回実施。映像講座や説明会動画を16本収録、配信した。また、通年で取り組む研究・開発プログラムを4シリーズ実施。アーカイブルームはアポイント制で開室。東京アートポイント計画の「TERATOTERA」「ファンタジア!ファンタジア!」「ジムジム会」といったイベントや勉強会など、オンラインにシフトしたプログラムを約20回実施した。



## 302発、誰もがいつでもどこでも学べる講座たち

前年に続き、コロナ禍への対応としてさまざまなプログラムがオンライン開催を決定。STUDIO302はジムジム会をはじめオンライン上の集いの場であり、配信や収録の実施会場として稼働し続けた。東京アートポイント計画が2年ぶりの公募を行うことになり、事業の取り組みや特徴を説明する映像をSTUDIO302で収録することに。限られた人数を集めて説明会をひらくよりも、いつでもアクセスできる映像コンテンツとして公開することに手ごたえを感じ、以降のレクチャープログラムは講座のライブ配信から映像コンテンツの収録配信へとシフトする。手話講座をはじめ、学びたいときに学べる講座として、アートプロジェクトに関わる層に向けて広く知見を伝える仕組みが生まれた。

年度の終わりが迫る2022年2月末、千代田区とアーツ千代田3331が2023年3月末に契約満了することが運営団体より伝えられる。常に必要に合わせて変化を続けてきた302に終わりが設定され、残りの1年のあり方を考えることとなる。

スタジオを活用し、Tokyo Art Research Labのスタディ、レクチャー、ディスカッションを35回実施。映像講座や説明会動画を30本収録、配信した。また、通年で取り組む研究・開発プログラムを3シリーズ実施。アーカイブルームはアポイント制で開室したほか、OPEN ROOMを2日間実施し、約290人が302を訪れた。東京アートポイント計画の「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」や「ジムジム会」によるイベントや勉強会など、オンラインにシフトしたプログラムを約10回実施した。



「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」映像プログラム収録の様子（撮影：齋藤彰英）  
「東京プロジェクトスタディ わたしの、あなたの、関わりをほぐす」の様子

## 集いの再開、段階的な解体

コロナ禍が徐々に落ち着いてきたことに伴い、集いの場としての302が再開した。オンラインで集うこと、学び合うこと自体を実験し続けたジムジム会は、12月に実施した2022年度の最終回にて実に3年ぶりの「フィジカルな集い」を実施。対面で得る情報の豊かさを確認するとともに、初めて会った気がしない、温かみのある親密感の醸成を可能にし続けたSTUDIO302に感謝の念を抱いた。講座の収録やトークプログラムの配信を継続するとともに、対面形式でのゼミや展覧会、OPEN ROOMなど12年間の知見がハイブリッドに展開する充実した1年となった。

2023年3月の退去を目途に、春先からアーカイブやスタジオ機能の移行先の検討をスタート。行先の決まった資料や機材を徐々に302から送り出す作業を続ける。2011年の3月11日、イベント中に震災を体験した302は、災禍の記録の可能性を考えるプログラムを2023年3月11日に開催し、すべての運営を終了する。

—  
スタジオを活用し、Tokyo Art Research Labの映像講座を約40本収録、配信した。2023年3月時点で、YouTubeでの総再生数は11万回を超えている。レクチャーやゼミを33回実施したほか、通年で取り組む研究・開発プログラムを3シリーズ実施。アーカイブルームはアポイント制で開室し、4日間のOPEN ROOMには約350人が訪れた。東京アートポイント計画の「ファンタジア!ファンタジア!」や「カロクリサイクル」、「ジムジム会」の収録や展覧会などオンラインと対面イベントを合わせて、約20回のプログラムを実施した。



壁画は撤去され、もとの白壁に戻ったROOM302  
本棚から書籍を取り出し梱包、退去に向けて準備を進める

りしろ

ポイント計画が、アートブ  
運営する「事務局」と話す  
の本(増補版)p.64

指さ場で当たり前  
作り方が通用しな  
新しいことをする  
ないといけない。  
いけない。しかも  
ないといけない。

こういうプロジェクトって、お互い暗  
黙知でやっているの、暗黙知で共  
有した景色で「何となくわかってるよ  
ね」って感じでやってることに、ちょっ  
とした危機感がある。そこをもう一步  
深く行くためには、「**具体的な表現**」であ  
りながら、見た景色について次にどう  
やってそれを明確に「**言葉**」にしてい  
けるか。『「やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる」  
小金井アートフル・アクション! 2009-2017活動記録」p.165

思えば1年前、  
1枚の妄想絵から  
『NICORABAN』p.1

変化を拒み、あた  
私たちの可能性

つねに多数派と少数派、常識と非常識は  
かつ複層的な境界線を、**自他ともに引き続**  
いる「**私たち**」。人々の多様な生のあり方を、  
点からまなざすかによって、境界線は揺れ  
つなぎ変わってゆく。『JOURNAL 東京迂回路研究 1』p.11

の「アート」は刻々と変化し続けるか  
、輪郭線では捉えられないが、だい  
い同じ場所を巡回している。小鳥に  
近づくときのように、そっと、さりげなく、  
ばに寄ること。『ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト 2010-2013』p.8

つくりかた研究所の行っ  
てきた大きな活動のひ  
とつは、端的に言えば、  
「問題にすらなりえない  
ようなどうでもいい問題」  
について「**だらだらと考  
え続ける**」ことである。  
『つくりかた研究所の問題集』p.211

失うことは一大事に違  
きたことで、じゃあ、毎回  
は、やっぱり予行演習が  
なで上手くこなしてゆく練  
たと思う。『東京スーブとブラン

評価とは、プロジェ  
提供するための情  
『アートプロジェクトを評価するた

### 言葉を編む

本章では、ROOM302に関わってきた  
アートプロジェクトの担い手たちが、  
それぞれの視点から出来事を振り返り  
ました。末尾では東京アートポイント  
計画 / Tokyo Art Research Lab  
ディレクターの森司が、ROOM302で  
の記憶を語ります。

面倒くさ  
しいもの。  
目がたい  
ものは  
ないかな、  
RT BRIDGE  
」p.5

ここで起きたことは、どこでも起こり得ることだし、もしかするとこれまで散々繰り返してきたことなのかもしれ

そもそも私たちは東京に「住  
んでいる」のか、それとも何  
年間も「滞在している」のか?  
『日常の巡礼』p.4

「このイベントは  
『「アートアクセスあだち 音まち千  
3.11が

2019年の夏のある日、仕事を終え、急いで地下鉄で末広町へ、地図に従ってアーツ千代田3331に向かいました。校舎3階の暗くて長い廊下を渡り、ようやくROOM302を見つけました。

私はアートや映画が好きですが、来日3年目にも関わらず日本語の能力不足で関連の仕事に就けず、周りに情報を共有できる人もいませんでした。そのとき、たまたまTARLが実施する東京プロジェクトスタディのことを知って、東京に対する思いを映像化できることに惹かれて、応募してみました。アートプロジェクトとは何かわからないまま、フォーマルな服装に身を包み、まるで転職活動のように不安のまま、ROOM302の扉をひらきました。

以来、週末にこの扉を開けて、ゲストやメンバーたちと対話の時間を楽しみにしていました。いつの間にか、自分はこの部屋の常連になりました。ここでは東京にHomeを感じた瞬間を共有したり、背景が異なる他者とコミュニケーションするときに感じたハードルと向き合い、自分の変化を記録したりしました。ささやかな日常のことを話し合うこと、自分の心境変化を創作とつなげることができるROOM302を自分の居場所だと感じました。

2021年に初めてプロジェクトの運営側に関わって、ROOM302の本棚を背景にプロジェクトのメンバー募集のための動画に出演しました。翌年もワークショップの宣伝動画のため再び出演しました。一緒に歩んできた事務局の仲間が「去年と比べて鄭さんは変わりましたね」と言っていました。

ROOM302は、私にとって学びの場であり、多くの素晴らしい人たちと出会い、自分自身の成長を見届ける場でもあります。ここに通ってまだ3年余り、来るたびにHomeに帰ってきたような気持ちを感じました。

いま、ROOM302と別れを告げることになりましたが、ここでの出会いや収穫が記憶に残るでしょう。これから、ROOM302がなくなると、昔の私のような人に扉を開ける行動力の大切さを伝えていきたいです。



鄭禹晨 | てい・うしん  
クリエイター

1993年台湾・台北生まれ。2016年来日し、2018年より訪日・在日外国人向けウェブメディア会社にて企画・翻訳・編集を担当。アートツーリズムを企画する傍ら、都市や異文化をテーマにした演劇、映像などのアートプロジェクトに携わっている。



3階のL字に曲がった廊下のいちばん奥にあるこの部屋は、西側一面が腰高の窓になっていて、昼間はいつもよく光が入っていました。この部屋にはいろいろな機会に訪れました。たしか東京アートポイント計画の2010年度の親睦会が最初。それから各種のイベント、講座、打ち合わせ。コロナ禍になってからは配信用の機材が入って、芸術祭のトークの収録にも使わせてもらいました。

なかでもいちばん思い出深いのは、「つくりかた研究所」の仮の拠点に使わせてもらった時期です。「仮の」というのは、建物を持たない研究所、というひねくれたコンセプトでこのプロジェクトをはじめたからで、それでもやはり集まる場所が必要だったので、折に触れ使わせてもらいました。

研究所のキックオフでは、30名近くが車座になって顔合わせをしました。シャイなメンバーが多かったから（私が筆頭）、視線の逃げ場になるように、床の真ん中にメンバーの手みやげのスイカを置きました。そのときの写真が残っています。

このプロジェクトは「つくりかたから考える」をモットーに、既存のルールにあえて乗らずに創作や活動の仕方を探る場でした。いま考えると、昨今プロの創作現場でも社会全体でも問われているモラルやリーダーシップや自主性や自治の問題が、凝縮されて現れていました。詳しくは

---

『つくりかた研究所の問題集』を読んでほしいのですが、参加者（研究員）同士の地道で膨大なコミュニケーションが必要でした。そのためにこの部屋を借りて、定期的に「開室日」というのを設けていました。

やがて研究所は「やっぱり拠点はほしいよね」となって別に場所を借り、結果としてこの部屋はあまり利用しなくなったけれど、そうやってプロジェクトが（あるいは人と人の集まりが）自分の足で立って歩き出していく準備のために、使える場所があったことはありがたかったです。

研究所以外にもその後につながる大事な出会いがたくさんありました。またいつかこの部屋が、またはこういう部屋が、さまざまなことの準備のためにひらかれていくことを、感謝とともに願います。



長島 確 | ながしま・かく  
ドラマトウルク

日本におけるドラマトウルクの草分けとして、さまざまな演出家・振付家の作品に参加。Tokyo Art Research Labのプロジェクトほか、東京アートポイント計画「戯曲をもって町へ出よう。」「墨田区／豊島区／三宅島在住アートレウス家」などに携わる。



「つくりかた研究所」の様子（撮影：川瀬一絵）

2021年まで仙台を拠点に活動していた一般社団法人NOOKは、東京の空気に触れながら小さな実践を行うことのできるサテライトスタジオとして、ROOM302を活用してきました。東日本大震災以降、東北のあちこちを歩き、風景や語りの記録をしていたわたしたちは、あのとき一緒に揺れた東京の人たちが“その後”をどのように生きてきたのか、東北の現状を見て何を感じるのか、知りたいと思っていました。

2018年には「部屋しかないところからラボを建てる」というTARLのプログラムを立ち上げ、東京で暮らすひとりひとりが関心事を持ち寄って、話し合い、調べものをしたり可視化したりする拠点として、月に一度、302に集まりました。それぞれが生活のなかで感じた疑問や発見、フィールドワークで得た知識やアイデアをテーブルに広げ、とにかく長い時間おしゃべりしていると、東京で暮らす仲間が感じていることと、わたしたちが東北で考えてきたことが自然と混ざり合い、これからについて話し合うことができました。その時間は確かに豊かで、とても楽しかったのです。

時が経ち、震災10年が過ぎた2022年春、NOOKは東京に拠点を移し、東京アートポイント計画の共催事業として、「カロクリサイクル」をスタートしました。カロク（禍録＝災禍の記録）を調べ、再活用しようとい

う一連の活動は、東日本大震災後に積み上げられてきた記録と表現にかかわるさまざまな実践を、ほかの災禍にかかわるカロク（たとえば関東大震災を描いた絵画、空襲後の焼け野原で詠まれた短歌、阪神・淡路大震災の体験をしたための手記……）とつないでいくことで、災禍の記憶を未来に手渡すための技術を見出そうとする試み。

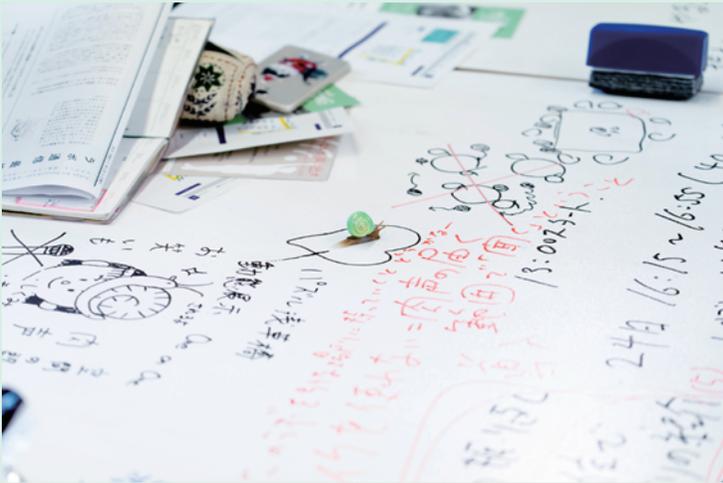
この一年間は、コロナ禍を経てスタジオ機能が整った302から、東京を歩いて見つけたことを発信したり、よその土地にいる人たちと一緒に災禍の記録を見て語る対話の場をひらいたり、場所に縛られないやりとりができました。

これからは、江東区に準備中のスペースにて、302で生まれた出会いとアイデアを生かしながら、地に足をつけて活動していきたいと思っています。



瀬尾夏美 | せお・なつみ  
アーティスト、一般社団法人NOOK

1988年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。土地の人のことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくる。2015年、仙台市で東北の記録・ドキュメンテーションを考えるための一般社団法人NOOKを立ち上げる。



アートプロジェクトをアーカイブすることを目指し、2010年にアーツカウンシル東京の東京アートポイント計画とアートアーカイブ事業をはじめることとなりました。プロジェクト名はPublic・People・Processの意味を「P」の言葉に込め「P+ARCHIVE（ピープラスアーカイブ）」。事業がスタートした背景には、2000年代に入ってアートプロジェクトが全国的に広がり、2010年に入るところには芸術領域だけでなく文化政策の領域にも少なからずインパクトを与えはじめたことがあります。プロジェクト型のアート形態の上に、運営主体も多様で小規模なものが大半なため活動の記録が残りにくく、チラシやカタログが保管されればまだ良いという状況でした。このままでは多くのプロジェクトの存在が消えてしまう危機感から、プロセスや人々の参加性に重きをおくアートをアーカイブする道を探っていました。当時はまだ先行研究がほとんどなく、海外事例やアーカイブ学などを参考にしながら手探り状態でアーカイブと向き合う日々が続きます。

事業の開始翌年、ROOM302の「アーカイブセンター」として、収集したアートプロジェクトの資料を一般公開する活動をはじめ、資料を展示する書棚もできました。それ以来、地道に活動を継続し、今年13年目に入り、収集した全国のプロジェクトの資料数は約2,250点。その間、東

京アートポイント計画と協働で、アーカイブに関わる人材育成のためのレクチャーシリーズやプロジェクトをリアルタイムでアーカイブ化するケーススタディ、90年代のプロジェクトをデジタルアーカイブしたプロトタイプづくり、プロジェクト運営者に向けたノウハウの開発などを行ってきました。さまざまな課題を残しつつもそれを越える多くの成果が生まれたと思います。当初、ある文化政策者から「アーカイブ?そんな時間のかかって大変なことをはじめてどうするのか?」と言われたことをいまでも覚えています。確かにアーカイブは多くの時間と労力を必要としますが、スタッフたちとともにエネルギーを注ぎながら彼らがアーカイブ専門者へと成長し、これからのアートプロジェクトのアーカイブを支える人材となったこともひとつの大きな成果だと感じています。末筆となりますがこうした機会とチャンスを与えてもらったことに心より感謝いたします。ROOM302で過ごした貴重な経験を活かし、これからの活動につなげて行きたいと願っています。



工藤安代 | くどう・やすよ  
NPO 法人アート&ソサイエティ研究センター

社会にかかわるアート実践に関心を持ち、調査研究・実践支援活動を行う。  
2009年にNPO 法人アート&ソサイエティ研究センターを設立し、その後、  
ROOM302にてアートプロジェクトのアーカイブ事業を始動した。



[P+ARCHIVE] 活動の様子

私が初めてROOM302を訪ねたのは2011年の夏、美術家・川俣正さんのトークシリーズ「東京を考える、語る」で建築家・山本理顕さんがゲストの回でした。3.11のあと、当時準備の進んでいた仮設住宅に対する問題提起にはじまり、集い住むことについて興味深いお話を聞かせていただいたのを覚えています。

私にとってはトークイベントを聞きに行く場所であったROOM302ですが、2013年に本棚の設計と制作を担当させていただくこととなり、それをきっかけに「訪れる人」から「設える人」になりました。旧校舎では音楽室として使用されていたため床から1段上がったステージがあり、イベント使用時にはそこに登壇者が座り、来訪者はそちらを向いている。その方向性をすこしだけ緩めるためにステージ以外の3方を本棚で取り囲むことで、書籍や広報物による背景をつくりました。それにより、アーカイブ機能や、ディスカッション、イベントなどのさまざまな使われ方において、その時々々に重心が揺れ動きながら、それぞれ異なる状況もイメージできる空間を目指しました。

その後もすこしずつ空間を更新する機会をいただき、最後に「設える人」になったのは2018年12月、プログラムオフィサーの大内さんから「東京アートポイント計画10周年の展覧会」をやろうと声をかけていただきました。最初の打ち合わせで「本が全部見られる」展覧会にしようということになり、リスト化すると10年分で200冊。発行された年代も、

共催団体も、プロジェクトも異なるこれらの本を画一的なフレームに収めるのではなく、本棚に入っていた「200冊」がパラパラと海に出て、それぞれが自立してあちこちに進んでいき、最後には仲間たちは同じ島に集まっている。そんな状況をつくりたいなと考えました。

とはいえ、私には島の成り立ちは決められず、東京アートポイント計画を知り尽くした大内さんに本の分類をお願いし、それをもとに私とスタッフとして呼んでいたレオとで展示台の島のデザインを進めました。その後「ことば」と「写真」が島を取り囲んでいくことになるのですが、語り尽くすことは難しいのでその試行錯誤については『10年を伝えるための101日「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」ドキュメントレポート』を読んでもいただければと思います。もしもこの「10年展」で「本」、そこから飛び出した「ことば」、それらを補完する「写真」、ひとつひとつが個性を持ちながら「ひとままとまりの気配をつくる」ことができていたとしたら嬉しく思いますし、この記録集や次の場にも「ROOM302」の気配が残ることを願っています。



鈴木雄介 | すずき ゆうすけ  
建築家

1983年静岡県静岡市生まれ。千葉工業大学工学研究科建築都市環境学修了。活動領域に合わせてチームを組織しプロジェクトの初期段階から設計、制作（施工）まで総合的に取り組む。ROOM302の顔となった本棚の制作や、展覧会に携わる。



ROOM302の開設から約10年が経った2020年7月、リモート会議やオンラインイベントに対応した「STUDIO302」がオープンしました。コロナ禍中の緊急事態宣言であらゆる文化イベントが中止になったタイミングで、ほかの文化施設に先駆けていち早く企画され、構想から約2カ月という超短期間で完成したオンラインスタジオです。その構築・運用を担当したことは、自分の仕事のなかでも重要な出来事でした。

STUDIO302のポイントは3つありました。1つ目は、「仮設と常設の中間」であること。もともとROOM302は人々が集う場所でした。「三密」が徹底的に回避されていた2020年は、すぐにリアルイベントが開催できるとは到底思えない状況でしたが、オンライン配信に機能を振り切るのではなく、再び集まれる日も想定した空間づくりを強く意識しました。

2つ目は、明確な役割分担のない空間。STUDIO302は、テレビスタジオのように出演者とスタッフを分けるのではなく、撮る側も撮られる側も一緒に壇上に上がり、機材を操作できるような空間構成に仕立てました。アートプロジェクトでは、人々の立場が逆転したり、ローテーションしたりすることも重要だからです。

3つ目は、「共通した風景（イメージ）」をつくること。STUDIO302発の映像は、どれもわざと似たような構図で映るようにしました。そのた

---

めにカメラを柱から“生やす”など、機材を盆栽のように配置し、位置を半固定化。もちろん操作を簡単にする意図もありましたが、映像のなかに「場所性」を生み出すための工夫です。もとのROOM302を知っている人も、オンラインイベントや動画を通じて知った人も「あの場所」としてイメージを共有できることを目指しました。

これらの工夫は想定通りに機能し、その後、オンライン・オフライン双方の「場」をつなぐことに成功したんじゃないかなと考えています。また、スタジオができたことで、レクチャー動画やインタビューなど、関連事業の映像アーカイブも充実しました。ただし、ROOM302やSTUDIO302という場所がなくなることで、今後の事業における記録や伝達の方法は否応なく変化するとは思いますが、場を持つ記憶、空間に刻まれた記憶をどうやって伝えていくのか。自分たちのテーマとしても抱えていきたいです。



いさわ たかし  
岩沢兄弟の弟、企画とディレクション担当

「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、空間や家具・什器から映像まで、幅広いクリエイティブ制作を手がける。「活動拠点づくり」を数多く手掛け、「STUDIO302」設計・制作・運用のほか、東京アートポイント計画「HAPPY TURN / 神津島」の拠点なども担当。撮影：ただ（ゆかい）



[STUDIO302] (撮影：加藤晴)



日曜日、10時15分の開講をめぐって受講生32人がROOM302に集まってくる。8人がけのテーブルに分かれて席につくと、直近のアートプロジェクトの体験共有や、それぞれの近況についてポツポツ会話がはじまったり、前回の宿題について質問をする人がいたり。それが2014年度に始動した「思考と技術と対話の学校」基礎プログラムの朝の風景でした。その後ホームルームがはじまり、学びの伴走役となるスクールマネージャーが出欠確認と1日の流れの説明を行い、ゲストによる授業がスタートします。受講生は、朝から夕方まで約7時間ほど、事務局の仕事について学び、実践者であるゲストからのさまざまな問いかけに揺さぶられ、お腹いっぱいになるまで情報を浴びる時間を過ごします。授業終了後も多くのゲストが残ってくださり、放課後には、より濃密な対話の時間が繰り広げられました。そのように隔週で開催される週末集中型の授業に加え、平日夜開催の授業も展開しながら、TARLのスクールプログラムの教室として、ROOM302に多様な人々が集いました。

アートプロジェクトの経験値も得意分野もさまざまな20代から50代の受講生や、アートプロジェクトの現場を支えるアートマネージャーやコーディネーターたち。国内外で活躍する多世代のアーティストたち。研究者や文化事業に携わる実践者。会場設営を担当する運営スタッフや記録を担当するカメラマンも、現場を支える実践者やアーティストたち

が担っていました。また、ROOM302で授業が繰り広げられるなか、その奥に位置する部屋「ROOM301」が教務室のようになっていて、ノマドプロダクションをはじめとする運営チームが学びのサポートをいつでもできるようスタンバイしていました。そうした環境のなか、受講生は初めてアーティストという存在に出会ったり、アートプロジェクトへの期待に胸を膨らませたり、キャリアについての不安を共有したり、アートプロジェクトの企画を構想したりと、学校という場を最大限に活用した時間を過ごしていたように思います。

学校の設計思想として、「学び合い」を意識した環境づくりということがありました。アートプロジェクトの技術を養うといった際、何か共通の正解や、共有できるフォーマットを用意できるような分野ではないため、多様な出会いを通して、柔軟な対応力を身につけ、さまざまな価値観や生き方に触れながら、思考力や問う力を養うことを重視していました。他者から学び、他者を通して、自分を見つめるという視点を大事にしながら、学校としては、いろいろな人々や活動との出会いの場をいかにつくり出すかを意識しながら展開していました。

世代も経験も社会の捉え方も多様な人々がよい塩梅に混ざりあう状況が生まれたのは、「学校」という枠組みによることが大きかったといえるでしょう。普段の生活から少し距離をおいて、学校という空間に身を

---

置くことで、時間を気にせず何時間も話し合うことができ、多くの「はじめまして」の出会いや、世代を超えた友情が育まれました。

ROOM302での出会いをきっかけに、自らアーティストの活動の場を訪ね、関係性を築いたり、授業で触れた活動を手伝いに行ったりするような動きも生まれていました。また、ROOM302での学びを経て、アートプロジェクトの事務局や文化機関、文化施設に就職したり、もともとアートの分野ではない方がキャリアチェンジをして新たな活動に取り組んだり、受講生同士でプロジェクトを企てたりする状況も見られました。

「基礎プログラム」からはじまり、「東京プロジェクトスタディ」の展開に至るまで、受講生たちはこれからの「アートプロジェクトを動かす人」、「アートプロジェクトを紡ぐ人」、「アートプロジェクトの核をつくる人」になることを目指していました。それぞれの人材像は確立されているものではなく、プログラムを通してかたちづくられていくところもあり、企画運営チームは、プログラム設計から会場づくりまでを試行錯誤しながら毎回の授業を動かしていました。学びの入口の環境を整えて、そこから先は受講生とゲストの相互作用によって場が育っていくことを期待しつつ、学校が用意したのは、アートプロジェクトを切り口にさまざまな人が集い、妄想し、対話し、実験しながら、いろいろな価値観や視点が蠢くことを可能にする「拠点」だったように思います。

---

2014年度から2021年度にかけて、約550名の受講生と、200名をこえる多様な専門性をもつ実践者たちにより「思考と技術と対話の学校」が展開されました。最後の2年間は、コロナ禍により、ROOM302に集う機会は少なくなりましたが、2010年の開室以降、ROOM302を中心に多くの出会いが生み出されました。あの教室に通った人々が、ROOM302の縁をもとに、さまざまな場所で活躍されることを祈りつつ、いつかまた新たな拠点で再会できることを楽しみにしたいと思います。



坂本有理 | さかもと・ゆり  
アーツカウンシル東京 事業調整課社会共生担当係長

Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の校長を務めた。また、『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』の企画・編集や、「ジムジム会(事務局による事務局のためのジムのような勉強会)」の立ち上げを担当した。



「思考と技術と対話の学校」には、さまざまな参加者たちが集い議論を重ねた

ROOM302については筆者自身も何回も利用させていただいた。その経験から整理すると、ROOM302には次の4つの機能があったと思う。

一つは会議室としての機能である。筆者も一員である東京アートポイント計画の選定会議はこの部屋で数多く開催された。

二つ目は、レクチャールームとしての機能である。東京アートポイント計画と連動する人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」では、この部屋を拠点に人が集い、自主的な学びを実践した。

三点目は、アーカイブ・センターとしての機能である。このROOM302では、アーツカウンシル東京とNPO法人アート&ソサイエティ研究センターとの共催により、アーカイブ・プロジェクト「P+ARCHIVE(ピープラスアーカイブ)」が2010年より開始された。このアーカイブにおいては、日本全国で開催されている多くのプロジェクト型のアート活動の資料を収集・配架するとともに、ウェブサイトで公開し、情報を検索できるようになっていた。

最後の四点目は、コロナ下の2020年7月に追加的に配備されたオンライン・スタジオの機能である。この「STUDIO302」では、さまざまなオンラインプログラムの収録及び配信が行われた。

これらの4つの機能については他の執筆者がより詳細に記述するであろうから、ここでは機能の列挙にとどめることとするが、機能のうち、特

に「アーカイブ・センター」としての役割が停止されることは実に残念なことだと考えている。

「アーカイブ (archive)」とは、組織や個人がその活動のなかで作成した文書や資料を体系的に収集し、これらを記録・保存する場所または機能のことである。このように「記録・保存」すべき場所そのものが閉鎖される、という事態は極めて遺憾なことである。

そもそも、このROOM302が解体される理由は、この部屋が位置する旧練成中学校、「アーツ千代田3331」の活動休止である。施設の所有者である千代田区は、「ちよだアートスクエア (アーツ千代田3331)」の13年間にわたる実績を踏まえ、同施設を暫定ではなく恒常的な文化芸術施設として利用する方針を2022年1月に打ち出した。その結果、「アーツ千代田3331」の運営者である合同会社コマンドAと千代田区との契約が2023年3月31日で満了することになった。

千代田区では、今後の方針や計画について「千代田区文化芸術プラン」等を鑑みつつ詳細の検討を進めているとのことであるが、2023年1月現在となっても、その検討結果は公表されていない。

実はこの案件は、2021年に区長の交代があって以降、急に浮上してきたものである。5期20年務めた前区長が引退したことで、区政刷新が区長選挙の争点となった。このような背景のもと、新区長が当選した

---

ことで、「新しい目玉の事業」として、「アーツ千代田3331」の路線変更が俎上にのったのではないか。

すなわち、今般の「アーツ千代田3331」の終了とは、文化政策とは関係のない別の力学によって、重要な文化政策が決定（廃止）されてしまう現象と見ることもできる。このような現象は「メタ政策」と呼ばれている。

より大きな問題は、このようなマイナスの「メタ政策」が「アーツ千代田3331」だけでなく、アフター・コロナ、ポスト五輪というタイミングにおいて、同様の事例が頻出していることである。

たとえば、文化庁メディア芸術祭は、次回の作品募集を行わないと発表しており、第25回（2022年3月）をもって終了することになる。新聞報道によると、文化庁は「歴史的な役割を終えた」と説明しているそうである。しかし、もしも本当に「歴史的な役割を終えた」と認識しているのであれば、次なる歴史像を描いた上で、それに対応する政策を展開すべきであろう。

また、2023年3月に予定されている文化庁の京都移転も、典型的なマイナスの「メタ政策」であろう。これは文化政策とは全く関係のない、東京一極集中を抑制するために国の機関を地方に移転するという政策の一環である。しかし、文化庁と同時並行で移転が検討されていた消費者庁の徳島への全面移転は、危機管理や国会対応に支障が出るという

---

理由で見送られた。では、文化庁は危機管理や国会対応は必要ないというのが政府の判断なのであろうか。ここから、中央省庁のなかでの文化政策の位置づけの低さが浮き彫りとなる。はたして、これらの案件は、文化審議会等で真摯に議論されたのであろうか。

これら一連のマイナスの「メタ政策」から理解できるのは、文化政策の如実な劣化である。

さて、このように文化政策の劣化した時代に我々にできることは一体何であろうか。

ここであらためて、ROOM302がアーカイブ・センターであったことを確認しておきたい。すなわち、今回のような負の歴史も含めて、この時代の文化のありようを次の世代に継承していくことが重要なのである。これが、ROOM302の解体に立ち会う我々のせめてもの責務なのではないか。ROOM302が解体されようとしているいま、このようなことを考えた。



太下義之 | おおした・よしゆき  
文化政策研究者、同志社大学教授

文化芸術に関わる研究、政策に携わり、独立行政法人日本芸術文化振興会「日本博」アドバイザー、大阪府・2025年万博アカデミック・アンバサダーほか、文化政策関連の委員を多数兼務する。2015年よりアーツカウンシル東京 東京アートポイント計画の評価・選定会議委員を担当。



ROOM302はアーカイブセンターとしても活用された

初めてROOM302に関わったのは、2014年の頃だったと思います。私はNPO法人Art Bridge Institute (ABI) に参画しており、ABIのトークイベントがROOM302で行われたのがそのきっかけでしたが、ROOM302の場所に対しては町内会の寄り合いのような居心地の良さを感じていました。

当時のROOM302は通常のイベントスペースのような備品が整っておらず、スピーカーは組み立て式、プロジェクターは脚立のステップに乗せる仕様で、言い換えるとすべての備品が“仮設”といった状況で、イベント開始前には時間をかけて空間を整える必要がありました。そうした手間のかかるROOM302でしたが、振り返ってみるとそのことがアートプロジェクトに関連するイベントにおいて、非常に効果的な“しつらえ”だったのだと強く感じています。つまり、空間を整えるプロセスがあったからこそ、イベント時に生まれるコミュニケーションを想像し、参加者との関係性をどのようにつくっていくかを考えることができたのです。これはアートプロジェクトを実施していく上で重要な思考プロセスだったのだと思います。さらに興味深かったのは、その“しつらえ”がイベント参加者同士のコミュニケーションも生じさせていたということです。それを感じられるのがイベントの終了後でした。

スタッフが撤収をはじめると必ずと言っていいほど登壇者であるゲス

---

トと参加者らが一緒になって片付けに参加してくれていたのです。そして、備品の受け渡しをしながらイベント内容から派生した会話が生まれ、撤収完了後には近くの飲食店でお酒を酌み交わすといった流れが常でした。

こうした状況が生まれたのは、単に片付けが「大変そうだな」と参加者が思ったからかもしれませんが、“整っていない空間”が参加者に対しての“関わりしろ”になり、トークイベントという一方的になりがちな空間を、町内会の催しのように主催者と参加者との区別のない空間にしていたのだと思います。

その後も「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」や「東京プロジェクトスタディ 合同共有会」など、ROOM302を使ったイベントの記録や運営業務に携わり、アートプロジェクトに限らずさまざまな刺激をいただきました。そのなかでもROOM302の場から受けた大きな刺激が、2020年7月のコロナ禍からはじまったシリーズ「手話と出会う～アートプロジェクトの担い手のための手話講座～」でした。

この講座はろう者講師と聴者生徒とのコミュニケーションを通して、手話言語だけでなく“ろう者の感覚に触れる”ことを目的としたワークショップ形式の講座であり、TARLが実施する講座のなかでもオンライン配信を用いた最初の講座でした。現在はオンラインセミナーが一般化

---

していますが、当時は実施者側も受講者側もオンラインには慣れておらず、ましてや言語学習という対面コミュニケーションが必須な講座を行うという、まさに暗中模索の状態でした。ただその一方で、コロナ禍で減少した“コミュニケーション”に対して新しい捉え方ができるという気配を感じ、思い切って運営を担当した仕事でもありました。

とはいえライブ配信はカメラの操作だけでなく、音声やネット環境などのオペレーションをリアルタイムで行う必要があり、通常の撮影業務とは似て非なる作業にかなりの不安がありました。自分でもさまざまな機材を買い揃え、テストを繰り返し、家中が無数のケーブルだらけになるほどでした。そうしたなかでスタジオ化されたROOM302すなわちSTUDIO302が大きな役割を果たしてくれました。それは単に機材が常設されていたということだけでなく、STUDIO302を構築したいわさわかしさんたちの考え方が機材構成に反映されていたからです。

オンライン配信の難しい点は、その手法や組み合わせが無数にあり、それによって生じるトラブルを把握しながら最適解を決めていくことにあります。しかし、STUDIO302はそうしたハイカロリーになりがちなライブ配信の選択肢を削り、整わせ過ぎずに“やれることを限定する”といった意図を持って構築されていました。つまり、ライブ配信の手法を考えるのではなく、限られた機材環境でどのようなコミュニケーションを

---

生じさせるのかを考える、そんな“しつらえ”になっていたということです。そうしたSTUDIO302のしつらえは、機材オペレーションばかりに注力してしまっていた思考を修正し、いかにして講師と参加者間の出会いをつくれるのか、それを考えるきっかけとなりました。システムをできるだけシンプル化し、視覚に特化させたコミュニケーションによる手話講座は、結果的に対面とは異なる学びの場となり、新たな手話学習やろう文化との出会いを創出することができました。

こうしてROOM302からスタジオ化までを振り返ってみると、この場所が常に完璧な環境だったわけではなく、整わせ過ぎない場所であったことが共通しているように思います。そしてまた、そうした“しつらえ”によってアートプロジェクトに必要なコミュニケーションを運営者側に考えさせる役割を果たし続けていたのではないかと感じています。



齋藤彰英 | さいとう・あきひで  
写真家、映像カメラマン

1983年静岡生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現修士課程修了。地形と水の関係性を題材に、写真を主とした作品の制作と発表を行う。Tokyo Art Research Labをはじめとするさまざまな企画の撮影、配信、収録などを担当している。



STUDIO302からは、手話講座をはじめとした多くの映像コンテンツが発信された

「教室は宇宙船 どこへだってゆける」これは、ぼくが通っていた小学校の校歌の冒頭です。作詞は詩人の谷川俊太郎さん。校歌は2番、3番と次のように続きます。「教室は魔法の部屋 だれとだってあえる」「教室は小さな国 なんだってできる」しかし、その母校は統廃合により失われ、校歌もいまは歌われることはありません。

ROOM302ができる前に、実はこの部屋に訪れたことがあります。旧練成中学校が統廃合され、その校舎を美術学校が新校舎建て替えのために一時利用していたときのことでした。その校舎が千代田区によりアートセンターへ改修されるにあたり、その運営者を選定するプロポーザルが行われることになり、その応募者を対象とした見学会が行われました。そのときのROOM302は、まだ音楽室のままでした。

ニューヨークのP.S.1コンテンポラリー・アート・センター（現 MoMA PS1）をはじめとして、学校が統廃合により使われなくなったあとに美術施設として転用された例は、国内にも数多く存在しています。教室の大きさが手頃であるのか、複数の教室が廊下でつながる関係が良いのか、とにかくもとの校舎を、ほとんど手を加えずに使っているものがほとんどです。千代田区のプロポーザルも、そんな流れに乗ったものでした。

審査の結果、ぼくたちが改修設計を担当したチームが運営者に選定され、アーツ千代田3331というアートセンターが生まれました。1階のギャ

ラリー部分はホワイトキューブへと本格的な改修を施しましたが、上階の教室たちは学校としての雰囲気を残すことを意図して、もとの天井を取り壊す程度のことしか行っていません。そのため音楽室も、前方のステージや黒板をそのまま残しました。竣工後、アーツカウンシル東京（当時は東京文化発信プロジェクト室）がテナントとなり、ROOM302がつくられたのです。

思い返すと、ROOM302における最初のプログラムである川俣正さんのトークにも参加しました。TARLが実施した「日本型アートプロジェクトの歴史と現在」の講座のとき、ROOM302はまさに教室そのものでした。その後もいろいろな講座に受講生として参加し、さまざまなゲストたちから話を聞き、途中からはトークのモデレーターも務めさせていただきました。一方で、ROOM302にはアートプロジェクトに関する資料が集められ、アーカイブとしての役割も持っていました。ぼくの研究室の学生たちが、アートプロジェクトをテーマに論文を書く際には、とてもお世話になっていました。また、東京アートポイント計画「長島確のつくりかた研究所」というアートプロジェクトでは、ROOM302は所員たちの活動拠点となりました。何をするわけでもありませんが、そこはみんなの居場所でした。

実はROOM302には、ROOM301という部屋がつながっています。

---

このROOM301は、レクチャー出演者の控室だったり、機材や備品の保管場所だったり、打ち合わせ場所だったり、ROOM302をさまざまにバックアップする役割を持っていました。元々この部屋は、小中学校のほとんどの特別教室に併設されている準備室でした。音楽室（ROOM302）と準備室（ROOM301）という関係をそのまま引き継ぐことで、ROOM302はさまざまな使われ方を実現できる場所となりました。また、ROOM302は、校舎の最上階の一番奥に位置しています。音楽室は、音の出る部屋であることから、ほかの教室から離れた校舎の端に配置されることが多いためです。そのことが結果的に、ROOM302をほかの部屋とは切り離された、秘密基地のような場所にしていました。

そして、2018年から、ROOM302で「東京プロジェクトスタディ」をはじめることになりました。アーティストの居間 theaterとともに、ミュンスター彫刻プロジェクトという芸術祭にヒントを得て、「Tokyo Sculpture Project」と題する彫刻と公共を考えるスタディのナビゲーターを、3年間にわたり担当しました。そのなかでは、参加メンバーとの話し合い、ゲストを呼んだレクチャー、ちょっとしたワークショップのような作業など、さまざまな活動をROOM302で行いました。すでにROOM302のいろいろな使い方を経験していたこともあって、ほとんどのことがこの部屋だけで十分に行うことができました。その一方で、3

---

年目にはCOVID-19に襲われ、ROOM302のステージ上にスタジオ機能が追加され、オンラインでのスタディも容易になりました。しかし、ぼくたちのスタディだけはスタジオを使うことはなく、ROOM302に集まることをやめませんでした。

アートプロジェクトにおいて、みんなが自由に集まることのできる拠点は必須です。もちろん、美術館のような大きな施設は必要ないのかもしれませんが。その意味では、この元音楽室であったROOM302は、準備室を併設していることもあって、アートプロジェクトの拠点としては、適切な規模と機能を持っていたのかもしれませんが。確かにROOM302は、どこへだってゆけて、だれとだってあえて、なんだってできる場所でした。



佐藤 慎也 | さとう・しんや

日本大学理工学部建築学科教授、八戸市美術館館長

アートプロジェクトの構造設計やツアー型作品の制作などに携わるほか、アーツ千代田3331の改修設計を担当。Tokyo Art Research Labでは「東京プロジェクトスタディ」ナビゲーターなどを務めた。

撮影：川瀬一絵



「東京プロジェクトスタディ Tokyo Sculpture Project」の様子 (撮影：冨田了平)

あとがきにかえて

デザイナーの福岡さんが組んだ本書のゲラを確認用に出力して手渡された。

「ROOM302」(以下では愛称として「302」と記す)の立ち上がりから伴走し続けたプログラムオフィサーの大内が編纂する2009年からはじまる「足跡を辿る」の頁をめくると、自分の曖昧な記憶が「そうだった、そうだった。」と手触りできる強度で呼び起こされ、掲載予定の写真は忘れていた景色を思い出させてくれた。写真の絵柄を語ることもできる自分も、目撃者として居続けたひとりだ。12年間の活動の場を閉じる。その当事者の自分ですら、すでに淡い記憶のなかで302を語ろうとしている。それゆえに302が我々の活動に対して果たした役割を記述し残しておく意義をあらためて感じている。続けて本書の構成を担ったプログラムオフィサーの櫻井が302での出来事を俯瞰し「言葉を編む」として編集した寄稿に目を通すと、302が出会いの場として、302を利用した人たちの結節点となり、折々に即した役割を担っていたことを窺い知ることができる。あらためて302がプロジェクトとともにあった大切な場所であったことを意識する。

我々は、2009年度から2022年度まで56団体と45件のアートプロジェクトを実施してきた。その「東京アートポイント計画」は、活動当初からアートプロジェクトを担う人材の育成や活動基盤の整備の重要性を認識し「Tokyo Art Research Lab (TARL)」の名のもとで育成事業を展開して

きた。その拠点が302だった。アートプロジェクトと連動しているのは当然のことだ。

TARLは、時代に応答したアートプロジェクトをつくる学びの場と、現場の課題やこれからの必要な技術について考える研究・開発を行っています。ウェブサイトでは、250点以上のドキュメントブックや100本以上の映像を見ることができます。

引用：東京アートポイント計画ウェブサイト (<https://tokyoartpoint.jp/about2022>)、2023年2月時点

302の役割は、東京アートポイント計画での実践の気づきを言語化し検証し残す場であった。まちをフィールドに展開するアートプロジェクトである東京アートポイント計画の担い手が、知的、技術的に育まれ、活動を準備できる場所であることが302に求められていたことだった。

「日本型アートプロジェクトの歴史と現在」はその好例で、6年越しのプロジェクトだった。座学として講座を開講し、その内容を書籍化するプロジェクトを組み、さらに英語版を編纂した。2014年からは包括的に学べる学校へと進化し「思考と技術と対話の学校」をスタートさせた。多くの受講生によって常に教室は使われ賑わっていた時代が数年続いた。

マネジメントに関する講座が各地で頻りに開催されるようになった時代背景を受けて、2018年からは「東京プロジェクトスタディ」としてゼミに近い形式での開講とし、その発展と

して3つのアートプロジェクトが2022年度から東京アートポイント計画の新規事業となった。

そのような学びの場としての302を象徴した企画が、10周年企画として展覧会スタイルで実施した2018年の「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」であった。そのときのことを鈴木雄介さんが回顧してくれているが、自分にとっても強く記憶に残る風景のひとつとなっている。

302に関わるその次の大きな出来事は、いわさわかきさんの「ROOM302内にオンラインスタジオを構築せよ」にあるSTUDIO302化であり、ここでの収録と配信を担ってもらった映像カメラマンの齋藤彰英さんが、ある種の欠け方を「用意されたしつらえ（設え）」と読み替えて価値づけてくれている。

数年に一度のリズムで模様替えするかのように内部空間に手を加えてきたが、配信スタジオの仮設感に象徴されるように、予算をかけ過ぎずにそれでも必要なものはあるという程々感を頃合いに整える塩梅でよしとしてきた。とはいえ、初期の教室のまま使っていた何もない時代の写真といまを見比べると、そこそこには手を入れてきた感は否めない。

このように使い込んできた302から物が運び出され、ボイド化というかニュートラルな誰のものでもない空間になりつつある。完全退去作業はちょっとしたプロジェクトに近いものがあつた。たとえばアートプロジェクトの資料を散逸させず、利活用が期待できる受け入れ先を検討し、打診し、無事

におさめるための段取りもそのひとつだ。本や資料の類が出たあとの棚は、棚を設営した鈴木さんのチームの手によって解体作業が行われている。

アーツ千代田3331からの完全退去日は3月15日。最後までこの場所を使い切ることにし、2022年度から東京アートポイント計画として一般社団法人NOOKがスタートした災期間を生きるためのアートプロジェクト「カロクリサイクル」が“3.11”にまつわる企画を302で実施する。2011年3月11日。自分は302で「イザ!カエルキャラバン! in 東京」の2年目の総括の会に参加していて、その開催直後に大きな揺れを感じ、校舎の外に避難した。帰宅困難者となった自分と大内は302に泊まった。アーツ千代田3331の店子としての12年は、東日本大震災にはじまりコロナ禍で終わる。時代に応答するかたちで302を臨機応変に活用してきた思いは強い。今後見えてくるアウトカムとインパクトを楽しみにし、302での活動の幕引きのご挨拶にかえさせていただき、お世話になりお力添えをいただきました多くのみなさまに心から感謝し退出したいと思います。ありがとう302。

東京アートポイント計画 / Tokyo Art Research Lab  
ディレクター 森司





DOCUMENT302

アートプロジェクトの担い手たちのラボ ROOM302の記録 2009-2022

企画・編集：櫻井駿介、大内伸輔

編集アシスタント：嘉原妙

監修：森司

デザイン：福岡泰隆

印刷・製本：グラフィック

本冊子は人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」の一環として制作されました。

Tokyo Art Research Lab (TARL) とは

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

<https://tarl.jp>

発行日：令和5年3月15日

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

ISBN 978-4-909894-46-5 C0070

営利、非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。

©Arts Council Tokyo

DOC

NUME

NTN

SOE



ARTS COUNCIL TOKYO